

注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【タイトル】

カプセルズ！

【作者名】

サボルアンデッド

【あらすじ】

怪獣が人間になっっている星で起こる、笑いあり、バトルありな不思議な日常。

そんな星に、謎の存在が現れる。

次々に現れる、本来の姿の怪獣や宇宙人たち！

人々を危険から守るために立ち上がる、三つの光！

小柄な体に大きな力！

その名も、カプセルズ！

(かなりの不定期更新です。)

第一話 怪獣な日常

宇宙の、遠いどこか。そこにその存在はあった。

消えかかりそうに小さい存在だが、どす黒く、大きさに比例した存在感を放つ。

「マダダ…マダオワツテイナイー！」

とそのとき、その黒い存在が突然謎の空間に引きずり込まれた。そこは、上も下も分からなくなるような色が渦巻いていて、不気味さしか見えてこないところだった。

「ココハ？」

「やっと見つけました」

「ダレダ！」

黒い存在に、細長く、人間と見えなくもない影が近づいた。

「なあに、しがない宇宙人ですよ。それより、私と組みませんか？」

「ナニ？」

一二つの存在の頭上に、一つの緑豊かな星が現れる。

「この星には、地球と同じような生命が多く存在します。それらを利用すれば、あなたの悲願はすぐに達成されるでしょう」

「オモシロイ。ソノハナシ、ノロウデハナイカ」

「交渉、成立ですね」

一二つの存在は、その美しい星―パーソ・モ・スター―に向かっていった。

『…先ほど、…町付近に、隕石が落下しました』

『衛星も直前までその存在を察知できず、周辺地域には混乱が…』

グアアアアアア！

『え、後ろ？は、え、ば、化け物!? ちょ、逃げ』

ガリッ！

ズザアアアア…

遠く広がる、宇宙。

この広い無限の空間には、様々な星に、様々な文明や生物が存在していると言われている。

そして、その中の一つ。我々人類が住む地球から、光の巨人たちの住むM78星雲、そしてそのもつと先にある、緑と青の豊かな、地球によく似た星。パーソ・モ・スター。この星では、地球では怪獣と呼ばれる生物が、人間に似た姿をとって生活している。

これから、あなたの目はあなたの体を離れ、この不思議な星の時間の中に入っていくのです。

~~~~~

パーソ・モ・スター、オトモニー国、カカントウ地区。

ある一軒家のベッドの中に、その少女はいた。

「くっ…むっ…」

優しい寝息をたてながら眠る彼女の名は、『ミサキ・ミクラス』16歳、高校二年生。

薄茶色の髪と、紅白の縞模様の角を揺らしながら寝息をたてていたが、そんな彼女の安眠を突然遮るように、ケータイの着信音が鳴った。

ティーン、ティーン、テティーンテンテッテテ

「うひゃあ…」

かなり大きめに設定してあったのか、その音は部屋中に響きわたった。彼女はあわててケータイをとり、通話を始めた。

「はい、もひもひ…」

「…ミサキ、もしかしてまだ寝てた？」

電話口の向こうから、透き通った呆れ声が聞こえてきた。

「や、やだなあー、そんな訳ないじゃーん」

「ふーん、なら良いけど、そろそろ家出ないとやばいんじゃない？」

「えっ？」

そういわれて部屋の時計をみると、短針は8、長針は30を指していた。

「…あ、やばい」

その時間を見て、ようやく急ぐべきだと考えた。

「ヤ、ヤバイヨヤバイヨー！ドウシヨドウシヨー！」

「落ち着きなさいって、今から支度すれば間に合うから。じゃあね」  
そういって、電話が切れた。

「と、とりあえず着替えないと」

そういうと、彼女は今まで着ていた服を脱ぎ捨て、床にほっぴり出していた制服を拾い、それを着始めた。

「…よっっー」

青い制服に身を包んだ彼女は、階下に降りていこうとする。

「っと、忘れ物忘れ物！」

しかし、何かを思い出したように、机の上にあった機械を取り上げ、左腕に取り付けた。それは、銀色を基本とした、真ん中に何かが入りそうな構造をしていた。

ダダダダッ！

ものすごい勢いで階段を下り、リビングに突撃した彼女は、朝食のトーストにかぶりついた。

「ガブッー」

「…あんたは、もう少し落ち着いて食べられないの？」

隣に座っていた、金髪に黒い三日月の角が生えた女性が言った。彼女はエリス・ミクラス。ミサキの姉である。

「ひょーふあふあいふあん、ふいふあんふあいんふあひ」

「…ああ、もう良いから好きにしろなさい」

そういうと、鞆を持って玄関へ向かっていった。

「行ってきまーす」

「いっふえはっはーい」

そついいながら時計をちらりとみると、時間はもう8時40分を指していた。

「おつとつと、そろそろ行かないと」

そついうと、残っていたサラダや目玉焼きを一気に口につっこみ、鞆を持って玄関に走った。

「行ってきまーすー」

そついって、彼女はドアを思いっきり開いた。

海岸沿いの道路で、二人の少女が立っていた。

「…遅いなあ、あいし」

銀色の髪に、額のランプが目立つ彼女はウヅキ・ウィンダム。どうやら彼女は目当ての人が来なくて少々苛ついてるようだった。

「まあまあ、ちょっとぐらいつとよ、いつものことなんだし」

苛つく彼女をいさめる、黒髪に短い角の落ち着いた感じの彼女はアスミ・アギラ。

「…おーいーウヅちゃん、アーちゃんー」

そこへ、駆け足でミサキが現れた。

「あ、ほら来たみたいだよ」

息を切らせながら、やっとの思いで二人の所にミサキが到達した。

「遅い！全く、いつまで寝てたのよ!」

「ご、ごめんうづちゃん！昨日遅くまでトレーニングして…」

「ハア…あんたってやつは」

「まあまあ、うづもそんなに怒らないであげて？ミサも、体調管理はしっかりしないとね」

ミサキに対し詰め寄るウヅキを、アスミがやんわりといさめた。

「…まあ、アスミが言っんなら」

渋々ながらもウヅキは納得し、ミサキから離れた。

「いやあ、さすがのうづちゃんもアーちゃんにはかないませんなあ」  
「？」

「それはあんたもでしょ？」

「まあまあ、そんなことより早く学校行こつよー。時間やばいよ」

そう言われてウツキが時計を見ると、時刻は8時55分を指していた。

「や、やばっ…ミサキ、アスミ、走るよー!」

ウツキが先導し、三人は坂を駆け上がり始めた。

「いやあ、風が気持ちいいですなあ」

「そうですねあ」

「んなこと言ってる場合じゃないでしょ!」

春の追い風を感じながら、学校への道を駆けていった。

~~~~~

キーンコーンカーンコーン…

市立光星高校。その中の教室の一つ。

「はい、じゃあ授業始めるぞー」

白と黒の混じった髪の毛に赤縁のメガネをかけた女性の教師が、始業の合図をしていた。

その時、教室の扉が勢いよく開いた。

「おはよあー!」ぞいます…!」

「…ミサキ、またお前か。一体いつになったらお前の遅刻癖は直るんだ?」

「や、やだなあーキリちゃん先生、ギリギリセーフですよ、ギリギリセーフ」

ガッン!

女教師、キリエ・フドウの鉄拳がミサキの脳天を襲う。

「ちゃんとフドウ先生と呼べ。はあ、まったく、早く席着け」

「うっ…はい」

その後、おそろおそろといった感じでアスミとウツキが教室に入ってきた。

「す、すみません…!」

「お、遅れましたあ…!」

キリエは声が出た方を振り向き、興味の無いような感じで言った。

「ん？ウインダムとアギラか。次からは気を付けろよー早く席着けー」

突然、先に一人で座っていたミサキが立ち上がった。

「ちよっとキリちゃん先生！何でその二人にはそんなに優しいんですか!？」

「こいつらは別に遅刻常習犯じゃないしな。それと……」

そう言うとキリエはミサキの席の所に近づいていき、彼女の頭を拳で挟み、おもいきりねじ押し始めた。

「ちゃんはいらないって何度言えばわかるんだ?」

「痛い痛い……ごめんなさい……」

しばらくしてから、キリエはミサキの頭から手を離し、何食わぬ顔で授業を始めた。

「早くお前も座れ、始めるぞ」

「うっ、横暴だあ……」

そんなやりとりを見ながら、担任、キリエ・フドウの受け持つ光星高校1年陸組の面々は、こつこつ思いつのだった。

(ああ、いつも通りだなあ……)

ここのやりとりでいつも通りの日常を実感するのであった。

第二話 カプセルズ出動せよ

キーンコーンカーンコーン…

「…くああ、やーっと終わったあ！」

自分の机に突っ伏して寝ていたミサキが、終業のチャイムが鳴ると同時に飛び起きた。

「全く、あなたにはもうちょっと真面目さってのがつかないもんかしらね？」

「まあまあ、そう言わなくても」

呆れ顔のウヅキと、それをいさめるアスミがミサキの机に近づいた。

「おお二人とも、おっはよー」

「おっはよーじゃないわよ。あんたいつつもヤメ先生の授業寝てるわよね？」

「ええ、だってしょうがないじゃん、ヤメツちゃん見てるとすごい眠くなってくるんだもーん」

現国担当のランコ・ヤメは、見ているだけで眠気を誘われると生徒に言われている。

「…はあ、何で私の授業って、ほぼ半数が寝てるんだろ。向いてないのかな、私…」

当の本人であるヤメは教卓の上に突っ伏していた。

「ま、いっつか、二人とも早く帰ろー」

「そーだねー」

「あ、待ってよー」

三人は、教室を後にした。

~~~~~

「クソッ！何だよ皆して、何で俺のことを地味地味言っただよー！」

繁華街の裏路地に、一人の男子高校生がいた。相当気が立っている



よついで、ゴミ箱や段ボールを片っ端から蹴散らして回っている。

「ああ、もうイライラする！いつそ、俺を無視する奴らなんて…」

「消えてしまえばいい、そう思うか？」

その時、目の前に突然黒服の男が現れた。

「うわっ！だ、誰だあんな！」

男子高校生の質問を無視して、男が歩み寄る。

「では、君が憎いと思っっている奴らを全員消せる力があるとしたら、どうする？」

「そ、そんなもんがあったら、そりゃあほしいけど…」

「では…」

そう言つと男は、懐から何かの機械を取り出した。全面が黒くゴツゴツした短剣とも言えなく無い奇妙な物だった。

「これを使いなさい」

「これは…？うわっ!？」

その機械にふれた瞬間、大量の闇がふきだし、その男子高校生の体に流れ込んだ。

「フッフ、さあ、その力を使い…」

「ヒカリを、ヤミへ」

~~~~~

「あー、たいくつだーうつちゃんー発芸かなんかやってよー」

「やるわけ無いでしょ」

「ふっ、これだから素人は」

「あんだ一体何者よ」

「よーしアーちゃん！このトーシロちゃんにお手本を見せてやれ！」

「え？え〜っと…。か、髪を垂らして、貞子！」

「10点！」

「そんなあ」

三人は、帰りの道を何ともない話をしながら歩いていった。

「いやー、それにしても最近暇だねえ。なんか刺激が欲しいって言うか……」

ピリリリ！ピリリリ！

その時、三人のケータイから同時に着信音が鳴った。

「！」

三人はケータイを取り出し、通話ボタンを押す。

『C002地点に怪獣が出現。カカントウ地区第4班、ただちに出動せよ』

スピーカーから、無感情な女性の女性の声が響く。

そして、三人はその声を聞き終わる前に、わき目もふらずにかけだしていった。

~~~~~

「ギギギ」

それは、ロボットと呼ぶには人間らしく、人間と呼ぶにはロボットらしい姿をしていた。両腕には巨大なドリルが装着され、機械仕掛けの装甲をしていたが、その隙間から見えるのは明らかに人間の肌だった。

チュイイイン

手当たり次第に周りにある物を壊してまわる。その手にかかれば、鋼鉄で出来た物も粉々に砕けてしまっている。

キキイーツ！

そこへ、何台ものパトカーがやってきた。先頭にいた車両から一人のモジャモジャ頭の男が現れ、それに続いて何人も警官が車から降り、横一列に隊列を作った。

先頭の男が、胸ポケットから通信機を取り出した。

「特攻A班、現場に到着しました」

『近隣住民の避難は完了している。特攻A班、発砲を許可する。』

通信を終えたモジャモジャ頭の男は、通信機をしまい、腰のホルスターから拳銃を取り出した。

「総員、構え！」

一糸乱れぬ動きで、警官全員が拳銃を構えた。

「発砲！」

銃声が響きわたり、弾は半分ロボットたちの大群に向かっていった。

しかし…

カカカアン！

弾はすべて、弾かれてしまった。

「怯むな！撃てっ！」

銃撃は続けられたが、その弾はどれも半分ロボットたちの体に弾かれてしまった。

「ギギッ！」

お返しと言わんばかりに、半分ロボットたちの顔上半分を隠していた仮面からレーザービームが発射され、警官たちのすぐ目の前の道路を焼け焦げさせた。そして、それを皮切りに半分ロボットたちの猛連撃が始まった。

レーザーの雨が警官隊を襲い、彼らは完全に戦意を失ってしまった。

「ひ、ひぎえあああ！」

「おっかさあああん！」

一目散に警官たちは逃げていき、あっという間に最初に出てきたモジャモジャの男だけになった。

「あいつら…！くそ、腑抜けが！」

しかし、その男の目の前に、レーザーが降り注いだ！

「！」

男はとっさに腕で顔を隠した。

(終わりだ…！)

そう思った瞬間。

「スパークレーザー！」

ズドオン！

自分の背後から放たれた攻撃によって、すべてが打ち落とされた。

「な、なあ!？」

とっさに後ろを確認しようとしたが、その瞬間、通信機から声が響いた。

『本部より入電、これ以上の攻撃は危険と判断し、特攻A班に撤退を命ずる。』

「な!でもまだ奴らは!」

『繰り返す。これ以上の攻撃は…』

思わず抗議をしたが、通信機からは事務的な返事しか帰ってこなかった。

「…特攻A班、撤退!」

モジャモジャ頭の男は、その場から去っていった。

「…行った?」

「…行ったみたい」

「いよっし…突撃い!」

三つの人影が、半分ロボットたちに襲いかかった。

「ギギ!？」

右腕につけた機械から伸びる剣で、半分ロボットたちに攻撃を加えていく。突然の攻撃で、半分ロボットたちは反応が出来ていなかった。

「ギギィ!」

しかし、やられてばかりで済むわけはなく、半分ロボットたちは腕のドリルで三人を追い払った。

後ろに飛び、地面に着地したその人影は、

「いやあー、なかなかやりますなあ」

「ま、それなりね」

「燃えてくるねえ!」

ミサキ、ウツキ、アスミの三人だった。

「それじゃ、行きますか!」

ミサキのその声を合図に、三人は右腕を水平に構え、装着していた機械を操作した。すると、その機械から乾電池の取り付け穴のようなものが飛び出した。

「セットアップ、オーケー」

機械から女性の声が聞こえるとともに、三人は懐から緑色の半透明カプセルを取り出した。その中には、電、炎、風を模した物が封じ込められていた。

「ミマケットチェンジ！」

そう叫び、三人はカプセルを機械にセットし、差し込んだ。

「チェンジマケット！タイプ：エレキ！」

「チェンジマケット！タイプ：フレイム！」

「チェンジマケット！タイプ：ウィンド！」

三人の体が粒子状の緑の光に包まれる。

「ギギイ！」

しびれを切らした半分ロボットたちが、三人にレーザーを打ち込んだ。

キキイン！

しかし、全て光に振れた途端に弾かれていった。

そして、光は三人の体に集まり、だんだんと形作られていった。光が収まる頃には、三人の体には鎧のような物が装着されていた。

ミサキには、腕の部分を大きく包むようなアーマー。そして、ヒレに見えなくもない、上半身を覆う茶色にクリアパーツの混じった鎧。

ウヅキは、背中や足の部分につけられたブースターに、腰の部分にはタンクが取り付けられた銀色の鎧。

アスミは、脚部を大きく強化するようなアーマーに、動きやすさを重視した流線型の鎧。

「エレキバトラー・1！」

「フレイムバトラー・2！」

「ウィンドバトラー・3！」

「ミカプセルズ、ミッションスタート！」

三人が、半分ロボットの大群に向かっていった。

「エレキエッジ！」

ミサキは電気を帯びた二本の曲剣を出現させ、半分ロボットたちを切りつける。

「ヤアッ！」

「ギギーッ！」

目にもとまらぬ連撃で、半分ロボットたちはどんどん消滅していった。

「いよっしー！」

「フレイムマグナム、スタンバイ！」

ウツキは銀色に輝く銃―フレイムマグナム―を構え、半分ロボットたちに向かって光弾を発射した。

「ギギー！」

ほとんどの個体が消滅していく。しかし、その中で光弾の雨をくぐり抜けた何体かがウツキに飛びかかった。

ウツキは、フレイムマグナムの側面に取り付けられたスイッチを操作した。すると、足や背中に装着されていたブースターの噴射口が半分ロボットたちに向けられ、無数の火炎弾が浴びせられた。

半分ロボットたちは、ほとんどが消滅された。

「行きますー！ウィンドハンマー！」

アスミは巨大な緑色の鎚―ウィンドハンマー―を取り出し、それを地面に叩きつけた。すると、周囲に突風が巻き起こり、ロボットたちは相当数が吹き飛ばされていった。

「やったあー！」

どんどんロボット達を蹴散らしていく三人。しかし、突然そこへ黒のオーラを纏った光弾が襲いかかった。

「うわっ」とー！」

三人は後ろに跳躍して攻撃を回避した。

『…ダレダ、オマエラハ？』

そこから現れたのは、黒の短剣を持った高校生ぐらいの男であった。しかし、その体からはどす黒いオーラが溢れ出ていて、眼光是赤く光っていた。

「…あいつ、まぢかー！」

ウツキが驚愕の声を出す。

『オレノジャマヲスルナ…キエロ!』

男が叫ぶと、周りに飛んでたオーラが男の左手に集まり、明らかな形を作っていく。そして、オーラが収まると、男の手には15センチほどの怪獣の人形が握られていた。

「やめて!その人形から手を離して!」

ミサキが叫ぶ。しかし、その制止を聞かず、男は人形の足に短剣の先を突きつけた。

「ダークライブ!ベムラー!」

その瞬間、男の体を黒い魔法陣のような物が包み込み、体を変化させていく。そして、魔法陣が消えたときそこにいたのは…

「ギヤアアアア!」

刺々しい体を持った、2メートルを超える怪人の姿に変貌していた…。